

# 桐が谷通信

CHUBU GAKUIN UNIVERSITY  
CHUBU GAKUIN COLLEGE

第48号 2013年6月20日

発行 中部学院大学 宗教委員会  
中部学院大学短期大学部

〒501-3993  
岐阜県関市桐ヶ丘二丁目1番地 TEL (0575) 24 - 2211

## 「新しい躍進のときをむかえて」

笠井 恵 二 (大学宗教主事)

今年も新入生を迎えて新学期が始まり、もう3ヶ月になろうとしています。本学は、これまで16年の永きにわたって全力をつくしてこられた岡本健先生に代わって古田善伯新学長を迎えて、新しく出発したところです。新学長は柔道7段の実力の持ち主とのことで、このような文武両道の学長をお迎えして、なにか学院全体に、キャンパスをとりまく新緑の自然に相応しいような力がみなぎっているような感じがいたします。先日は、野球部・ゴルフ部・弓道部女子・陸上部女子の全国大会出場の壮行会が行われました。

今年は片桐龍子先生が岐阜で裁縫学校を始められてから95年目になります。先生は、当時貧しい状況におかれていた少女たちのために、手に職をつけて自立する力をつけてやりたいという愛の思いから始められたのです。そして教育にあたっては、先生の信念であった神様に感謝するところ、すなわち宗教教育をとおして少女たちの情操を育ていこうとされました。先生は確固たる信念に生きた大変強い女性だったように思われますが、その強さの底に限りない優しさを秘めた女性だったようにお見受けします。そのような女性によって始められた本学院は、5年後には創立100周年を迎えることになるわけでありまして、本当にこの学院の歴史には、神様の祝福が満ちていると言わざるを得ません。このような本学の歴史をお話しすると、学生たちは深い感銘をうけ、ここに来て本当によかったと言ってくれます。

私は本学に着任する前は京都のマンモス大学にいましたが、こちらのごじんまりとした大学の良さというものを日々味わっております。学内を歩いていると、ほとんどの学生が顔見知りとな

り、そして、お早うございます、こんにちは、と挨拶してくれます。なかなか、このような大学はよそには見当たりません。

本学では入学式、卒業式は礼拝形式で厳粛に執り行われます。学生と教職員の奉仕によるクワイアと吹奏楽によって執行される式に参列した経験は、誇らしい思い出になるのではないのでしょうか。そしてとくに今年嬉しく思うのは、グレースホールとグローリアホールで月曜日と木曜日にもたれるチャペルアワーに、沢山の学生さんたちが集まってきたことです。これにはもちろんゼミの先生がたのお勧めなどもあることと思いますが、若い日に、こうしてパイプオルガンの聖歌の下で、静かに自分を見つめるひとときをもつということは、一生の宝になる経験ではないのでしょうか。

私はこちらに来てから6年目になりますが、以前いたところが大変幸せだったので、ある意味で後ろ髪を引かれる思いでこちらにきました。今になって、こちらに移ってきたのは、やはり神様の導きだったと思っています。そしてこちらに来てから、教員、学生、そして事務局の方々、多くの素晴らしいひとびとと知り合うことができました。

以前わたしは、日本キリスト教団の3つの教会で合計6年間、牧師をやっておりましたが、そのあと京都にある世俗的な学校で28年間教えておりました。それがこちらに来てからは宗教主事という大切な役目を与えられまして、北海道から九州まで、さまざまなキリスト教の学校の集会に参加する機会が与えられました。そのような機会をとおして、やはりこの学院のもっとも大切な理念、中核は、キリスト教にこそあるのだということを感じております。そして信者でない先生や事務局

の方々も、建学の精神を尊重して下さっていることに、日々感謝しております。

戦後、本学の責任者のバトンタッチを引き受けられた孝先生が龍子先生に、この学校を神道からキリスト教に変えてよろしいですかと伺ったところ、龍子先生が「どうぞどうぞ、私の神様は日本の神様で、あなたの神様は世界の神様ですから」

と仰ったことには、限りなく深い意味があると思っています。16世紀にフランススコ・ザビエルが鹿児島に上陸してキリスト教を布教してから、キリスト教だけが正しい宗教で、ほかの宗教は間違っているという信念のもと、改宗を迫ったのがキリスト教の宣教でした。(最終ページに続く)

### ランチタイムシアター 世界のはじまり～創世記 1章—3章～を演じて

演劇サークル ◇◆◇Smily face◆◆◇ 足立友恵(幼児教育学科2年)

聖書の物語を演劇にしてみないかというお話をいただき、今回、幼児教育学科の有志による演劇サークル、Smily faceで創世記の一部を演じることとなりました。短い準備期間の中で精一杯取り組み、5月28日の昼休みに、「ランチタイムシアター」としてお披露目することができました。

演じるにあたって、大切にしたいポイントがいくつかありますが、そのうちの二点について書かせていただきます。一つ目は、「分かりやすく、親しみやすい聖書」ということです。キリスト教にあまり親しみのない方にも「聖書の中にこんな話があるのか、面白い」と思ってもらえるような内容を目指しました。実際に作品を作りだしたときも、メンバーの中で創世記を知っている人は、以前授業で学んだことがある私一人という状況でした。そのような中で、メンバーに創世記についての話をするというところからのスタートでした。

しかし、ただ単に楽しく演じているだけでは、皆さんにお披露目をするに相応しくないとはい、聖書の言葉に込められたメッセージを最後に伝えるということは作品に取り掛かることから



決めていました。これが、二つ目のポイントです。

私たちが演じた部分は創世記3章「蛇の誘惑」までです。その終わりの部分に神の愛が描かれています。それは、「食べたら死ぬ」とまで言われていた、善悪の知識の木の実を食べてしまったアダムとエバに対して、衣服や自らの力で生きる道を与えたこと、また、命の木の実を食べてしまわぬよう、道を封鎖したことです。私たちは特に、命の木の実についての解釈を強調しました。もし、命の木の実を食べていたとしたら、私たちは、永遠の命を手に入れることができたかもしれません。しかし、果たしてそれが幸せでしょうか。——私たちは、いつ死ぬか分かりません。もしかしたら、明日死ぬかもしれません。命はそれほど尊いものであり、だからこそ、私たちは“今”という瞬間を大切に生きていくのです。これこそが、神が私たちに与えた“幸せ”ではないかと思います。



私たちの今回の演劇は、今しかない学生生活を精一杯楽しむための機会となりました。

### ハンドベルについて

短期大学部 幼児教育学科 岡田 泰子

本学には、「天使のハーモニー」とも称される素晴らしい楽器、シューマリック製のハンドベル

5オクターブ3セット(183個のベル)が備えられています。主にサークル活動として、入学式や卒業式、クリスマス礼拝などの学内行事、またハンドベルフェスティバルや依頼演奏など学外活動にも恵まれてきました。また昨今では、授業の中で

学生の皆さんに触れてもらい、演奏の機会が増えてきているところです。

ハンドベルの魅力は、何といてもその音色の美しさでしょう。約8割が銅、2割が錫で仕上げられた鐘の本体（キャストイング）に、振り子（クラッパー）が触れることで、神々しさ溢れるあの音色が生まれます。ピアノと同じく、音程は1音1音異なり、大きさも重さも違うベルを演奏者（リンガー）が平均4個のベルを担当し、曲を組み立てていきます。まさに「チームワークの楽器」と言えるでしょう。

これから多くの皆さんに、この本学ならではの楽器に出逢って欲しいと願っています。



### 卒業式・入学式のクワイアに参加して

リハビリテーション学部 大嶽昇弘

私はここ数年前から卒業式・入学式のクワイアに参加させていただいています。クワイアは職員と学生の混成です。クワイアに参加する職員は、1月に約1年ぶりに再会し、「ニュルンベルクのマイスタージンガー」を先ず練習します。「ダーツデー・・・・」ここで1年の空白がなかったかのように声がそろいます。私以外のクワイアのみなさんはすばらしい声の持ち主で、いいなと思ったりしています。

そしてよいよ卒業式・入学式ですが、クワイアのメンバーは少々早く会場入りし、まだ客席にはだれもない会場で最終の練習をします。やがて定刻となり、学生と保護者の方々の会場入りと



なります。さあ式が始まります。吹奏楽部の演奏が始まり、私たちクワイアの出番です。幕が上がり、「ダーツデー・・・・」と各パートが一生懸命に歌い、すばらしいハーモニーとなります。最初のうたを歌い終わったころ、緊張が少し解れ、会場いっぱいの学生や保護者の姿がようやく見えてきます。

学歌「翔いて」は卒業式においては、社会に出ても本学の卒業生として頑張りたい、また入学式においては、これから本学で沢山学んで欲しいと願いながら、歌わせていただいています。今後も卒業生、新入生へクワイアを通してエールを送りたいと思っています。



### チャペル活動に関わって

リハビリテーション学部 笠野由布子

4月より宗教委員としてチャペルアワーをはじめとするチャペル活動へ参加しています。チャペルアワーではチャペルプログラムを配布するお手伝いをし、チャペルが始まるといつも決まって一番後ろからスピーチ聞き、賛美歌を歌います。この場所から眺めていると、チャペルアワー全体の雰囲気を感じることができます。学生のみなさんがスピーチを聞いている様子や、奨励者の語りかける優しい声や、パイプオルガンの音、賛美歌を歌う皆さんの声など、静寂の中にも温かい空気の漂うチャペルを楽しませていただいています。

チャペルアワーは月曜日と木曜日に行われていますが、特に月曜日には関キャンパス、各務原キャンパス両キャンパスの大勢の学生が参加してくれています。グレースホールに準備された椅子に座りきれないほどの参加者のあった時には、学生の皆さんが自ら予備の椅子を準備してくれたり、チャペル終了時には進んで片づけを手伝ってくれたりなどの優しさに触れる機会があります。そんな心がほっこりするような優しさに触れ、清々しい気持ちで1週間が始められることに感謝しています。また、日々の忙しさに流されて人の細やかな優しさなどに気付かないで通り過ぎてしまっていたり、自分自身を振り返る機会も逃してしまっていることがあります。グレースホールでスピーチを聞き、パイプオルガンの音を聞くことで、ちょっと立ち止まって考える時間を与えてもらっています。

2013年度 宗教講演会

**演題：「緩和ケアが目指すもの ～小さな病院の大きな挑戦～」**

**講師：長野・愛和病院チャプレン 山崎 正 幸 先生**



日時：7月1日（月） 第2限（11:00～12:30）

（第2時限の授業は全学で行いません。）

場所：中部学院大学 関キャンパス 11301 教室

### 講演要旨：

二人に一人ががんになる時代といわれています。治療の飛躍的進歩によって、早期に発見すれば治療することも可能ですが、その一方で、がんの再発・進行・転移のために生き続けることが出来なくなる場合もあります。

このようななかで、2007年に「がん対策基本法」が施行されました。目指すところは、「質の高いがん医療の均霑化」とともに「抗がん治療に緩和ケアを組み入れた包括的がん医療への転換」です。特に後者で言及されている「緩和ケア」は、2002年改訂のWHO（世界保健機関）の「緩和ケアの定義」が前提とされています。それは一般に流布している「終末期がん患者への治療を断念した看取りのケア」とは違い、痛みや症状への専門的な治療を中心に最後まで患者が積極的に生きていくことを支援するケアであるとともに、家族も含めた全人的ケアであるといえるでしょう。このような緩和ケアががん医療に統合されるならば、私達の人生の質は随分と変わってくるはずですが。

とはいえ、「緩和ケア」を受ける患者さんのなかには、地上の人生からの旅立ちを目前にしている方も少なくありません。どのようにその日を迎えるかもまたケアの重要な課題です。死をタブー視する現代文化を変える模索も緩和ケアの臨床の場から生まれていくことでしょう。

私は、現在、緩和ケア専門病院（病床数48床、訪問診療部・訪問看護部併設）である愛和病院のチャプレン（病院付牧師）をしています。小さな病院の大きな挑戦の一端を映像も交えて紹介いたします。そして、皆さまにも考えて頂きたいのです。緩和ケアが担ってきた課題は、医療施設内でのケアを超えて「コミュニティケア」（山崎章夫）と呼ぶべき課題として自覚する時を迎えているからです。人々が地域の中で自分らしく人生を完成させることが出来るように支え合う社会を実現したいものです。

### 講師略歴：

新潟県生まれ。同志社大学大学院神学研究科博士課程前期課程卒業。日本キリスト教団松山教会伝道師、各務原教会牧師（中部女子短期大学講師兼任）、衣笠病院（横須賀市）チャプレン、小田原教会牧師を歴任。2001年より松山東雲短期大学助教授・教授・宗教主事。2011年より愛和病院（長野市）チャプレン。社会福祉法人「愛媛いのちの電話」理事・評議員・スーパーバイザー。社会福祉法人「長野いのちの電話」評議員・研修委員長。

（2ページから続き）しかし1962年から65年までローマで行われた第二バチカン会議でカトリックの立場は180度転換しまして、それからは、カトリック教会は他の宗教も永遠の救いの光に目を向けているということを認めましょうという立場に変わりました。だからそれからは、宣教は改宗を迫るものではなく、他の宗教と対話を行って、そ

れぞれの宗教がそれぞれの宗教的な深まりを深めていくのを互いに助け合っていこうというものに変わってきたわけです。これは、龍子先生がすでに1945年に考えておられたことではないでしょうか。そのような伝統をもつ本学でキリスト教の真理をお伝えする使命を与えられていることに感謝しております。